小説文の「迸る時間」

吉田　廣

1．はじめに

筆者は、先に『フランス小説「女の一生」を斬る――小説文の成り立ちを探る――』を上梓した（2004年、大阪経済法科大学出版部）。そして、そのなかで、第1章では時間構成を主にストリームの観点から、第8章では同じく時間構成を今度は主としてスペースの観点から分析した。

ところが、第1章のテクストと第8章のテクストとのあいだには、前掲書ではあまり触れえなかった大きな同一性が認められる。それは「迸る（ほとばし）時間」の取り扱われ方に関する同一性である。つまり、一定の文章スペースのなかで、連続的に継起するストーリー上の出来事が時系列に沿って叙述される、といったタイプの言説のことである。淡々とした筆の運びのなかにあって、この種の言説は多かれ少なかれ際立ったバリエーションを生み出すはずのものである。

小論では、小説文におけるこの「迸る時間」について考察しよう。

2．第1章のテクスト

まず第1章のテクストを掲げる。

> 恋！　それは二年このかた、それが近づいてくるという刻々募る不安で彼女をみたしていたものであった。いまや彼女は自由に愛することができるのだった。出会いさえすればいいのだ。そのかたに！
>
> どんな人かしら？　彼女にもはっきりわからなかった。また考えてみたことさえなかった。そのかたはそのかたなのだ。それだけのこと　5
> だった。
>
> ただ、自分がその人を心から愛し、その人も力のかぎり自分をかわ

いがってくれるであろうということだけは知っていた。二人は今宵のような夜、星空から降る光の灰を浴びながら散歩するであろう。手に手を取って、たがいにぴったり寄りそい、心臓の鼓動を聞きながら、肩の温かみを感じながら、二人の愛を夏の夜の心地よく澄んだ空気のなかに溶かしこみながら、愛情の力だけでやすやすと胸の奥の奥にまで忍びこめるほど結びつけられて、二人は散歩をつづけるであろう。

そしてこれは、清純な不滅の愛情のなかで、無限につづくのである。

すると、突然、その人が、自分のすぐ目の前にいるような気がした。と、いきなり、漠とした肉感の戦慄が、足の先から頭のてっぺんにまで走った。彼女は自分の夢を抱きしめようとするかのように、無意識のしぐさで両腕を胸にぴったり押しあてた。そして、見知らぬ人の方に差出された唇の上を、あたかも春の吐息が彼女に愛の接吻を与えでもしたかのように、何ものかが通りすぎて、彼女はほとんど失神しかけた。

突然、はるかかなたの、屋敷のうしろの道の上に、夜のなかを歩く人の足音が聞えた。すると彼女は、気ちがいじみた魂の衝動にかられ、不可能なことや、天佑的な偶然や、神の助けによる予感や、運命の小説的な配合などを信ずるあの無我夢中の気持になって、こんなことを考えた。「もしもあのかただったら？」と。彼女は不安に胸をときめかせながら、道行く人の調子正しい足音に耳を傾けた。きっと門の柵の前に立ちどまって、一夜の宿を求めるにちがいないと思いながら。

その足音が通りすぎてしまうと、彼女はだまされたあとのように悲しくなった。だが自分の希望の愚かしい興奮に気がつくと、その気ちがいじみた態度がわれながらおかしくなって、ほほえんだ。

すると、すこしは気持もしずまってきて、今度は、もっと筋道の通った夢想の流れに、自分の心を漂わせた。未来を見すかそうとつとめ、自分の生活の足場を組もうとしたのだった。

その人といっしょにここで、海の見えるこの静かな屋敷で生活しよう。きっと子供が二人生れるだろう。男の子はあの人のもので、女の

子は自分のものだ。すると二人の子供が篠懸（すずかけ）と菩提樹のあいだの芝生の上を走っている姿がまざまざ目の前に見えてきた。父親と母親は、子供らの頭ごしに、情熱のこもった視線をかわしながら、恍惚とした目で彼らのあとを追う。

彼女はこうしていつまでも、いつまでも、とりとめのない夢にふけりながらじっとしていた。そのあいだに、月は空の旅をおえて、海に沈もうとしていた。空気はずっと冷たくなっていた。東の方の地平線が白んでいた。右側の農園で、一羽の牡鳥がときをつくった。と左側の農園から別の幾羽かがこれに答えた。鶏舎の囲いごしに聞えてくるそのしわがれ声は、ずっと遠くから聞えてくるかのように思われた。そして、いつとはなしに白んできた大きな空からは、星が姿を消していった。

どこかで小鳥のちちという鳴き声が目をさました。さえずりは、はじめはおずおずと、木の葉の繁みから聞えてきた。やがてそれは大胆になり、震えをおびた、嬉々とした調子になって、枝から枝、木から木へとひろがっていった。

ジャンヌは突然、自分が光のなかにあるのを感じた。そこで、両手に埋めていた顔をあげた。と、暁の燦然（さんぜん）たる光に目がくらんで、思わず目を閉じた。

ポプラの大きな並木の陰に一部分隠れている真紅の雲の峰が、目をさました大地に、血のような光を投げていた。

そして、徐々に、輝く雲を突き破り、木々に、平野に、大西洋に、全地平線に火の矢を浴びせながら、燃えあがるような大きな太陽が現れた。

ジャンヌは幸福感でなんだか気でもちがったような気持だった。輝かしい自然の事物を前にしての狂おしいばかりの歓喜、無限の感動が、彼女の心を溺らせ、心は茫然と己れを失っていた。これはわたしの太陽だ！　わたしの夜明けだ！　わたしの生活の始まりだ！　わたしの希望の門出だ！　彼女は太陽を抱きしめたい欲望にかられて、輝きに

> みちた空間に両腕をさしのばした。彼女は話したかった。この朝の誕生のような神聖な何事かを叫びたかった。だが彼女は力ない狂熱のなかに、ただ麻痺したように立ちすくんでいた。それから、額を両手に埋めて、目に涙がいっぱいたまっているのを感じた。そこで彼女は心地よく泣きじゃくった。 70

大まかに言って、この断章には「ゆったりと流れる時間」と「迸る時間」とが二つずつ交互に現れている。

前者は自由間接話法の使用とほぼ軌を一にして表出されている。

まず、1行目から14行目までの第1部分は、これを一つの自由間接話法だと見なすことができるだろう。そして、将来の恋人についてのジャンヌの夢想のなかで、時間がゆったりと過ぎていく。

ところで、具体的にはどれほどの時間が過ぎていったのだろうか。

自由間接話法は、語り手が登場人物の物思いを整理した形で地の文のなかに繰り広げるものである。したがって、ストーリーの持続時間を字数や行数からにわかに推定することは困難を伴う。けれども、当該の箇所は30分程度の持続時間に相当すると見なすのが妥当ではないか。

つまり、1分ほどで語られる言説がこれだけ長い持続時間を喚起しているわけである。「ゆったりと流れる時間」とは、このような事態にほかならない。つまり、ナレーションの持続時間がストーリーのそれよりも遥かに短い場合のことである。

その極端なケースとして、ナレーションの持続時間がほとんど無に等しい場合が考えられる。ここの断章から例を採るならば、41〜42行目の「彼女はこうしていつまでも、いつまでも、とりとめのない夢にふけりながらじっとしていた」などがそうである。この一文は、まさに、ゆったりとした時間の流れを喚起している。とりわけ、字句的には、「いつまでも、いつまでも」「とりとめのない」「じっと」などの言葉が、その持続時間における起伏のなさを強調している。

あるいはまた、本文中の例ではないが、「翌朝」とか「数日後」などといった言い回しでは、一定の持続時間が明白な形で省略されている。その時間のな

かでは特筆すべき何事も起こらなかったことが意味されている。まさしく、起伏のないゆったりとした時間が流れたということが示唆されているわけである。

これに対して、15〜31行目の第2部分では、10分とか15分といった程度のストーリーが、第1部分とほぼ等しい持続時間のナレーションによって語られている。ここはもはや自由間接話法の箇所ではなく、連続的に継起する、主として感覚的または衝動的な出来事が、時系列に沿って叙述されている場面である。

したがって、相対的にナレーションの「切迫度」が高まっている。ジャンヌの身に次々と起こる出来事が、間髪を容れずにここでは語られている。われわれ読み手は、ジャンヌの驚き、興奮、期待といった瞬間ごとの感情を、彼女と分かち合う。

とはいっても、その分かち合いは十全なものではありえないはずだ。1分程度のナレーションの持続時間と10分ないし15分程度のストーリーの持続時間との差異が厳然と存在しているからである。われわれはやはりスクリーンを見ているのであって、スクリーンのさなかに没入することはできない。

繰り返しになるが、「時間が迸る」といっても、多くの場合、それはあくまでも相対的なものなのである。第1部分から第2部分への移行に認められる、ナレーションの速度の変化は、読み手の受け止め方にもよるだろうが、多かれ少なかれ段階的である。

けれども、より子細に見てみると、15行目の「すると、突然」、16行目の「と、いきなり」および22行目の「突然」という字句は、それら自体において「時間の迸り」を表出すると言える。

「突然」という語には、ストーリーの持続時間が皆無に等しいという意味がこもっている。いわば、ナレーションの持続時間とストーリーのそれとが、そこにおいて瞬間的にぴったりと一致する。こうした語句とそれらによって導かれる一文が読み手に一種の衝撃を与えるのは、このような事情に起因する。

これに類した現象は、直接話法の形態のもとに記されたジャンヌの内的独白「もしもあのかただったら？」(26行目)にも認められる。

この独白は、直接話法のつねとして、ナレーションとストーリーのそれぞれの持続時間が重なり合う場である。ここにおいては、ナレーションの速度が極

度に減速し、ストーリーの進展と一体化する。ストーリーの「切迫度」は最高潮に達して、文字どおりの意味で時間が迸り出る。

もっとも、だからといって、直接話法の連続である戯曲と比較して、小説文の方が「時間の迸り」の点で劣っているとは即断できない。

事実はその逆であって、戯曲には「時間の迸り」という要素がほとんど存在しない。戯曲における直接話法の連続性そのものに、「時間の迸り」を相殺してしまう逆効果が存在するからだ。

つまり、ナレーションの速度の緩急というファクターが、時間を迸らせるためには必要だということである。言い換えれば、バリエーションがどのように効かせられているかという点が重要である。

ところで、鮮明なバリエーション、きわだったコントラストが、以上の第2部分と32〜48行目の第3部分とのあいだには設けられている。先にも引用した「彼女はこうしていつまでも、いつまでも、とりとめのない夢にふけりながらじっとしていた」(41〜42行目)という一文からも窺えるように、この第3部分における時間の流れは実にゆったりとしている。

すなわち、1分程度のナレーションが数時間にもおよぶストーリーに対応している。

もっとも、この部分のなかにおいて時間が一様に流れているわけではない。そこには、文章を魅力的なものにするために不可欠なバリエーションがある。

第一に、35〜40行目の「その人といっしょにここで、海の見えるこの静かな屋敷で生活しよう……父親と母親は、子供らの頭ごしに、情熱のこもった視線をかわしながら、恍惚とした目で彼らのあとを追う」は例示的な自由間接話法である。つまり、「とりとめのない夢」(41行目)の一例である。

すでに述べたように、自由間接話法には登場人物の物思いを整理した形で呈示するという側面がある。だから、われわれ読者は、一連の整然とした言説を、あたかも一つのオブジェでも眺めるように見やるといった立場にある。

しかし他方では、この自由間接話法ほど、登場人物の心境のただなかへとわれわれをぐっと導き入れる言説は珍しい。つまり、この話法ほど、登場人物に対する読者の感情移入を強烈に引き起こす言説はあまりないのである。

この後者の意味において、自由間接話法の箇所では、登場人物とわれわれ読者とが同じ時間を生きるのだと言えよう。一方では時間がゆったりと流れているようでいながら、他方では時間が迸り出るという二つの側面を、自由間接話法は備えている。

したがって、自由間接話法のこの箇所と、その直後の「彼女はこうしていつまでも、いつまでも、とりとめのない夢にふけりながらじっとしていた」という一般的な地の文とのコントラストは、かなりなまでに鮮やかである。

第3部分のもう一つのバリエーションは、ジャンヌの物思いと並行して外界の変化が描かれている点にある。

登場人物の内面と周囲の空間とを重畳的に表現するという手法には、ストーリーの上での時間の流れを停止させる、もしくは、ほとんど停止させるという効果がある。なぜなら、同一の持続時間がそこでは繰り返し表出されるからである。

「そのあいだに、月は空の旅をおえて、海に沈もうとしていた。空気はずっと冷たくなっていた。東の方の地平線が白んでいた」（42～44行目）および「そして、いつとはなしに白んできた大きな空からは、星が姿を消していった」（47～48行目）の箇所は、夢想に耽るジャンヌを取り巻く空間のゆったりとした変化を描いている。内面の緩やかな様相と外界の等しく緩やかな様相が連続的に喚起されることによって、この部分におけるストーリーの持続時間の長さがそのぶん重畳的に強調されているわけだ。

ところで、「月は空の旅をおえて、海に沈もうとしていた」「空気はずっと冷たくなっていた」「東の方の地平線が白んでいた」「白んできた大きな空からは、星が姿を消していった」の四つの表記は意味内容において反復的であって、いずれも夜明けの諸相を表している。

個々の表記がゆったりとした時間の流れを表出しているのだが、その緩やかな持続時間が4回にわたって表されているのだから、ここでのストーリーの進展は格別に穏やかである。

まとめて言えば、小説文における「ゆったりと流れる時間」の効果は二つの要因によって創出される。一つは、ナレーションの持続時間がストーリーの持

続時間よりも格段に短いことである。いま一つは、時間の流れの緩やかさを表す言い回しが重畳的になされていることである。

第3部分の後半はこの両方の特質を兼ね備えているわけだから、そこでの時間の流れは非常にゆったりとしていると言わねばならない。

それでは、「右側の農園で、一羽の牡鳥がときをつくった。と左側の農園から別の幾羽かがこれに答えた。鶏舎の囲いごしに聞えてくるそのしわがれ声は、ずっと遠くから聞えてくるかのように思われた」（44～46行目）についてはどうであろうか。

ここには二つの意味で「時間の迸り」の示唆のようなものがある。

第一に、「右側の農園で、一羽の牡鳥がときをつくった。と左側の農園から別の幾羽かがこれに答えた」というナレーションの持続時間は、ストーリーの持続時間とそれほど異ならない。はたして、この箇所に限って言えば、連続的に継起する出来事が時系列に沿って叙述されている。

第二に、「聞えてくる」「思われた」という字句からは、ジャンヌの感覚がここでは問題になっていることがわかる。つまり、ここの箇所を通して、われわれ読者はジャンヌの感覚にぴったりと寄り添っている。そういった意味で、ジャンヌと、彼女が生きる時間をわれわれは分かち合っている。

これらの二つの点から、ここの箇所は、時間の迸りをある程度まで感じ取らせるものだと言えよう。

けれども、鳴き交わす鶏の声は「しわがれ声」である。したがって、意味性において隠微だと言える。それは「ずっと遠くから聞えてくるかのよう」についても同断であって、いずれにしても、緩やかな時間の流れを唐突に破るものではない。むしろ、時間の流れの緩やかさにいささかの彩りを添えるといった程度の趣である。

また、その「しわがれ声」は次の段落の「小鳥のさえずり」を対照的に予示する機能を帯びてもいる。

ともかく、隠微的意味性という要因が「ゆったりと流れる時間」にかすかな彩りを添え、その逆に顕示的意味性が「迸る時間」を強調すると一般的に言うことができるだろう。第1部分および第3部分と比べても、時間が迸る第2部

分の意味内容の顕示性は明白であったことを想起しよう。たとえば、「すると、突然、その人が、自分のすぐ目の前にいるような気がした」とか、「突然、はるかかなたの、屋敷のうしろの道の上に、夜のなかを歩く人の足音が聞えた」などの表記の、鮮烈ないしは鮮明なニュアンスが思い起こされる。

次の49～70行目の第4部分では、三つの事象を巡って、顕示的な出来事が、連続的に継起するものとして描き出されている。それらの事象とは、「小鳥のさえずり」「太陽の出現」「ジャンヌの歓喜」の三つである。

この第4部分においてこそ、事象が脈動し、時間は迸り出る。第1部分の緩やかさ、第2部分の相対的な迸り、第3部分のきわまりない緩やかさに引き続いて、この第4部分では絶対的とまで言ってよいような迸りが表出されている。

第一の事象である「小鳥のさえずり」について、まず見てみよう。

49～52行目の当該箇所からは、聴覚と視覚の両面での継起的な漸増が読み取れる。

聴覚的には「目をさました小鳥のちちという鳴き声」→「おずおずとしたさえずり」→「それに加わる大胆さ」→「震えをおびた嬉々とした調子」の順で、継起的出来事が連続的に叙述されている。そして、全体を通して、表現されている意味内容は漸増的である。

それは視覚の面でも同様であって、「木の葉の繁み」→「枝から枝」→「木から木」という順序で、喚起される空間が漸増している。

ここの3行余りの言説に対応するストーリーの持続時間は、どれほどであろうか。15分程度とでも推定できよう。ナレーションの持続時間がストーリーのそれよりも格段に短いわけであるが、以上のような継起的出来事の顕示性における二重の漸増がそのことを相殺して、「時間の迸り」の効果を醸し出している。

それに、「時間の迸り」なるものは言説のバリエーションのなかで捉えられる、あくまでも相対的なものであることはすでに述べたとおりである。はたして、黎明の持続時間と比べれば、「小鳥のさえずり」のそれはかなり瞬間的である。

この間の事情は、「太陽の出現」という二つ目の事象の喚起に関しても、あ

る程度まで認められる。

56～60行目での黎明の描写においては、描写対象が静的状態から動的変化へと移行している。

まず「ポプラの大きな並木の陰に一部分隠れている真紅の雲の峰が、目をさました大地に、血のような光を投げていた」(56～57行目)では、太陽は、ポプラ並木の向こうの雲の、そのまた向こうにいまだ隠れている。これは静的描写である。

それが、次の段落では、一転して動的描写に変化している。それとともに時間が迸り出るのは言うまでもない。

すなわち、雲から現れ出た太陽が「木々に、平野に、大西洋に、全地平線に火の矢を浴びせる」わけである。そして、「小鳥のさえずり」の場合と同じように、ここでも空間的漸増が時間の推移に並行するものとして描かれている。けだし、ここの箇所は、顕示性の増大が「時間の迸り」を強調してあまりある事例である。

最後の「ジャンヌの歓喜」についてはどうであろうか。

まず、53～55行目には「ジャンヌは突然、自分が光のなかにあるのを感じた。そこで、両手に埋めていた顔をあげた。と、暁の燦然たる光に目がくらんで、思わず目を閉じた」とある。

ここでは、数秒間のナレーションがやはり数秒間のストーリーを語っている。臨場感に溢れており、時間が迸り出ている。

あるいは、ナレーションの持続時間がストーリーのそれを凌駕しているとすら見なせるかもしれない。語られている内容がそれほど束の間のことだからである。そのように見なすならば、ナレーションはもはや単にストーリーを語っているのではなく、スローモーションでジャンヌのそのときの一連の動作を活写していることになる。いわば、時間の怒涛とでも形容すべき事態が発生している。

それは、多かれ少なかれ、ここのテクストの最終段落「ジャンヌは幸福感でなんだか気でもちがったような気持だった……そこで彼女は心地よく泣きじゃくった」についても同断である。

最後の「それから、額を両手に埋めて、目に涙がいっぱいたまっているのを感じた。そこで彼女は心地よく泣きじゃくった」を除けば、ここの箇所は一連のスローモーションだと見なせる。朝日を眼前にしたジャンヌの歓喜が、連続する状態や行動という形態のもとに、きわめて克明に描き出されているからである。ここにおいて時間は怒涛のように奔流している。

より詳細に見てみると、61〜63行目の「輝かしい自然の事物を前にしての狂おしいばかりの歓喜、無限の感動が、彼女の心を溺らせ、心は茫然と己れを失っていた」における語句の並行的配列は、顕示性が非常に強い。

すなわち、「狂おしいばかりの歓喜」と「無限の感動」が重畳的に並行し、「彼女の心を溺らせ」と「心は茫然と己れを失っていた」もまた重畳的並行の様相を呈している。そして、この一文の全体は、先行する一文「ジャンヌは幸福感でなんだか気でもちがったような気持だった」の敷衍だと解せるので、これらの二文のあいだにも重畳性が認められる。こうして、ここの箇所の顕示的ニュアンスは著しく高揚され、その高揚感が、ほとんど必然的にジャンヌの次の叫びへとつながっている。

この叫び「これはわたしの太陽だ！　わたしの夜明けだ！　わたしの生活の始まりだ！　わたしの希望の門出だ！」は、内的言説だとも受け取れるし、一種の間接話法だとも解することができる。いずれにしても、時間の迸りは圧倒的なものがある。それは、表現レベルの重畳性によって強調され、顕示性の反復によって増幅されている。

こうした反復は、66〜68行目の「彼女は話したかった。この朝の誕生のような神聖な何事かを叫びたかった。だが彼女は力ない狂熱のなかに、ただ麻痺したように立ちすくんでいた」の箇所にも等しく認められる。感動のあまりの「力ない狂熱」が、三つからの文に分けて繰り返し表現されている。

かくして、瞬間的なジャンヌの状態が8行にもおよぶナレーションによって喚起されている。すなわち、ナレーションの持続時間がストーリーの持続時間に怒涛のように押し寄せている。ここのテクストの終結箇所でジャンヌが「泣きじゃくった」のは、こうした時間の奔流に抗し切れなくなったためにほかならないとも言えるだろう。

3．第8章のテクスト

次に第8章のテクストを掲げる。

部屋のなかは人でいっぱいだった。母親は肘掛椅子にどっと腰をおろして、喉をつまらせていた。男爵は手をぶるぶる震わせながら、走りまわり、何か品物を持ってきたり、医者に相談したり、すっかりまごついていた。ジュリヤンは忙しそうな顔つきをして、部屋のなかを縦横に歩きまわっていたが、気持は冷静だった。それからダンチュ後家が、こういう場合にする顔つきで、寝台の裾の方に立っていた。何事にも驚かされない、経験を積んだ女の顔だった。看護婦、産婆、それに通夜女もつとめるこの女は、この世に生れ落ちる者を取りあげ、彼らの産声を聞き、彼らの新しい肉を産湯で洗い、初の下着に包み、それからまた、今度は、おなじように落ちついた態度で、あの世に旅立つ者たちの最後の言葉、最後のあえぎ、最後の戦慄に耳を傾け、また、酢で彼らの使い減らされた肉体をぬぐい、死衣に包んで、最後のお化粧をしてやった。出生と死のあらゆる不慮のできごとにたいして、いささかも動揺することのない無関心さを身につけていた。

炊事女のリュディヴィヌとリゾン叔母は、遠慮して、廊下の扉に身を寄せて隠れていた。

病人は、ときどき、弱いうめき声をもらしていた。

二時間のあいだ、お産はまだまだ手間取ることだろうと皆は思っていた。ところが、夜明けごろ、突然、陣痛がふたたび猛烈に始まり、やがて、ものすごいものとなった。

ジャンヌは、思わず、食いしばった歯のあいだから叫びをもらしながらも、たえずロザリのことを考えつづけていた。ロザリはすこしも苦しまなかった、ほとんどうめきさえしなかった、子供は、私生児は、らくらくと苦しみもなく生れたのに、と。

乱れに乱れたみじめな心のなかで、ジャンヌはたえず自分たち二人

のあいだを比較していた。そして、神を呪っていた。かつてはあんなにも正しいと信じていた神を。運命の不埒なえこひいきを憤り、正しさや善をお説教する人々の罪深い嘘を怒っていた。

ときとして陣痛が、頭のなかのいっさいの考えが消えうせてしまうほどはげしくなることがあった。もはや力もなく、生命もなく、苦しみを感ずるだけの知覚しかなかった。

でも、痛みがしずまる瞬間には、ジュリヤンから目を離すことができなかった。もう一つ別な痛みが、魂の痛みが、あの日のことを、女中がこのおなじ寝台の脚もとに、両脚のあいだに子供をはさんで、いま自分の胎内をこんなにも残酷に引裂いている小さな存在の兄弟をはさんで倒れていた日のことを思い出させて、彼女をぐっとしめつけた。そして、いささかの曇りもない記憶で、あの横たわった娘の前に立ったときの夫の身ぶり、まなざし、言葉をはっきり思い出した。そしていま、夫の考えていることがその動作のなかにはっきり書かれているかのように、それを読みとることができた。あのときとおなじような、うるさいといった気持、あの女にたいしていだいたとおなじような無関心、父となることによっていらいらさせられる利己的な男性のおなじような冷淡さを読みとった。

だが恐ろしい痙攣が彼女をとらえた。「死にそうだ、死ぬんだ！」と思わず胸のなかで言ったほどに残酷なひきつけだった。すると、狂おしいばかりの反抗心が、呪いたい気持が胸をみたした。自分をめちゃくちゃにしたこの男、自分を殺そうとしているこのまだ見ぬ子供にたいするはげしい憎悪がむらむらとわきおこった。

この重荷を自分の胎内から投げすてようとする最後の努力で、彼女は、ぐっとからだを緊張させた、するといきなり、腹のなかが急にからっぽになったような気がした。そして苦痛もしずまった。

産婆と医者が彼女の上にかがみこんで、からだをいじくっていた。二人が何かを取りあげた。するとまもなく、かつて一度聞いたことのある、あの押し殺したような音が、彼女をぞっと身震いさせた。それ

から、あの苦しげな叫び、猫の鳴き声に似た赤ん坊の弱々しい泣き声が、彼女の魂に、力のつきはてたかわいそうな全身に、ぐっと刺しこんできた。そこで彼女は、無意識の身ぶりで、両腕をのばそうとした。

それは、喜びが彼女のからだを横切ったのだ。それは、咲き出たばかりの新しい幸福にたいする衝動だった。彼女は、一瞬にして、解放され、苦痛もしずまり、幸福になった。かつて味わったことのないほどの幸福だった。心も肉もふたたび元気を取りもどしていた。母になったということを感じたのだ！

子供がどんな顔をしているか見たかった！　あまり早く生れたために、髪の毛も爪もまだはえていなかった。でも、この幼虫のような赤ん坊が動くのを見たとき、口をあけて泣きだすのを見たとき、皺くちゃの、しかめ面をした、この生きている月足らずの子にさわってみたとき、彼女は抵抗しがたい喜びにひたされた。自分は助かったのだ。あらゆる絶望から守られたのだ、ほかのことはもう何もできなくなったほどに愛するものをつかんだのだ、ということを理解した。

このテクストは、三つの主要な部分によって構成されている。「ジャンヌの陣痛が始まってからの二時間の様子」（1～17行目）→「夜明けごろの猛烈な陣痛」（18～43行目）→「子供の誕生と苦痛の鎮静」（44～69行目）の三つである。

以下では、「時間の迸り」の観点から、これらの三つの部分を順番に見ていくことにしよう。

まず、第1部分は、時間の流れが停止した観を呈している。

17行にわたるナレーションの持続時間がそこには設定されているが、たとえば、「母親が肘掛椅子にどっと腰をおろして、喉をつまらせていた」（1～2行目）のは「二時間のあいだ」（18行目）続いていた状態であるし、「ジュリヤンが忙しそうな顔つきをして、部屋のなかを縦横に歩きまわっていたが、気持は冷静だった」（4～5行目）のも、その同じ持続時間において続いた状態である。また、ジャンヌ自身についても、「病人は、ときどき、弱いうめき声をもらしていた」（17行目）とあるだけである。

つまり、第１部分に登場する人物はすべて一定の状態に置かれ、それが二時間続いたということが述べられているわけだ。それぞれの人物描写は、相互に並べ換え可能であり、この限りでは、第１部分は羅列型の文章と何ら変わるところはない。

時間の流れは淀んでおり、迸りは皆無だと言えよう。

ただ、この時間の淀みは、迸りを予期させるものだとも見なせる。登場人物のだれもが出産を心待ちにして、各人各様の状態に身を置いているからである。だから、この淀みは暗に迸りをはらんだそれである。

そうしたなかにあって、ダンチュ後家の描写だけは特異である。

５～14行目の「それからダンチュ後家が、こういう場合にする顔つきで、寝台の裾の方に立っていた……出生と死のあらゆる不慮のできごとにたいして、いささかも動揺することのない無関心さを身につけていた」に認められるこの人物の特徴は、多かれ少なかれ動揺している周囲の人物のそれとは、根底から対照的である。

そして、このダンチュ後家の描写に仮託して、人間の生死が繰り返される悠久の時の流れが喚起されている。「看護婦、産婆、それに通夜女もつとめるこの女は、この世に生れ落ちる者を取りあげ……酢で彼らの使い減らされた肉体をぬぐい、死衣に包んで、最後のお化粧をしてやった」（７～13行目）という息の長い一文からは、個々の生を呑み尽くしながら、滔々と緩やかに流れる大河のイメージさえも窺えよう。その意味で、後家の描写においては、ナレーションの持続時間をストーリーのそれが遥かに凌駕しており、時間の流れは格別にゆったりとしていると言わねばならない。さらには、ここの箇所のストーリー性は『女の一生』全体のそれまでをも持続時間の点で凌いでいる。

日々の人間の営みによって小説文のストーリーが出来上がっているのだが、その営みのすべてが空虚なものに見えてくるくだりである。けだし、ダンチュ後家が体する普遍性は、その他の人物の刹那性と際立ったコントラストをなしている。

続く第２部分（18～43行目）の出だしにおいては、時間が迸り出ており、それは、時間が淀んで停滞したような第１部分と鮮明なコントラストをなしてい

る。すなわち、「二時間のあいだ、お産はまだまだ手間取ることだろうと皆は思っていた。ところが、夜明けごろ、突然、陣痛がふたたび猛烈に始まり、やがて、ものすごいものとなった」(18〜20行目)のくだりである。

このくだりのなかの「突然」という語の特質については、すでに前節で述べたとおりである。すなわち、発語の瞬間にストーリーの持続時間がナレーションのそれにぴったり重なり合い、もって、この語に導かれる一文の「切迫度」が高揚される。

けれども、このような形でストーリー・ラインの上に出現した「ジャンヌの陣痛」ではあるが、結局のところ、第2部分を通して、その様相が三つのパートに整理されているのだと言える。そして、そのぶん、ここの部分の記述が便宜的な性格を帯びてしまっている。

すなわち、「陣痛が中程度」→「陣痛が極度」→「陣痛が軽微」の順番で描写の筆が運ばれている。ナレーターがストーリーをこのように整理していることは、「ときとして陣痛が」(29行目)と「でも、痛みがしずまる瞬間には」(32行目)の二つの表記から明白である。

つまり、第1部分と比較すると、この第2部分は、時間が迸り出ている観を呈しているものの、典型的な時間の迸りまでには至っていない。本来の意味で時間が迸るのを目撃するためには、次の第3部分を待たねばならない。その意味では、この第2部分は、時間が淀んでいる第1部分と時間が奔流する第3部分とのあいだの過渡的箇所だと言えよう。

それでも、ロザリの場合と自分の場合を比較する際のジャンヌの思考過程からは、かなりの「切迫度」が感じ取られる。「ロザリはすこしも苦しまなかった、ほとんどうめきさえしなかった、子供は、私生児は、らくらくと苦しみもなく生れたのに、と」(22〜24行目)の箇所や、「そして、神を呪っていた。かつてはあんなにも正しいと信じていた神を。運命の不埒なえこひいきを憤り、正しさや善をお説教する人々の罪深い嘘を怒っていた」(26〜28行目)の箇所は、前節で取り上げた自由間接話法のそれにほとんど匹敵するような切実さをわれわれ読者に感じさせる。

それは、ジャンヌが心に思ったことが、こういった箇所で赤裸々に述べられ

ているからにほかならない。

なるほど、こうしたくだりは、形式の点では自由間接話法の直接性にはおよばない。けれども、内容に注目するならば、われわれがジャンヌに感情移入をしている以上、その他の話法形態のもとでも、彼女が生きている時間がわれわれによって十分に共有されうることを、これらのくだりは証拠立てていると見なせる。

同様のことは、ジュリヤンを眺めるときのジャンヌの思考過程についても言える。

32行目から始まる一段落の全体がそれの喚起に充てられているのだが、とりわけ「そしていま、夫の考えていることがその動作のなかにはっきり書かれているかのように、それを読みとることができた。あのときとおなじような、うるさいといった気持、あの女にたいしていだいたとおなじような無関心、父となることによっていらいらさせられる利己的な男性のおなじような冷淡さを読みとった」(38〜43行目)の箇所は、自由間接話法と同じくらいに、あるいは、それ以上に臨場感に溢れている。

それは、やはり、ジャンヌの思いが赤裸々に表されているからである。

また、表現上の重畳性も密接に関係しているのは確実である。一方では「読みとることができた」「読みとった」の二重性、他方では「うるさいといった気持」「無関心」「利己的な男性のおなじような冷淡さ」の三重性が、相互に組み合わさって、夫を眺めるときのジャンヌの憎悪を深々と表出している。

こういうわけで、ストーリーの持続時間が三つのパートに整理されている第2部分ではあるが、それぞれのパートにおいて、われわれ読者は、ジャンヌが生きる時間を多かれ少なかれ彼女と共有する。その限りにおいて、時間の迸りの萌芽、ないしは、素描のようなものがこの部分には認められる。

ストーリーの進展の無さからくる第1部分での時間の停滞、「陣痛」の始まりに端を発する第2部分での時間の迸りの素描——。これらを受けて、第3部分の「分娩のとき」がくるのだが、この第3部分(44〜69行目)を通じては時間が奔流している。種々の出来事が継起的に描き出されている。そういうものとして、第2部分から第3部分への移行の箇所は、文章がドラマチックに展開

する様相を呈している。

そればかりではない。

第2部分では「陣痛が中程度」→「陣痛が極度」→「陣痛が軽微」の順序で筆が運ばれてきていた。そして、その直後に、第3部分を導入する「だが恐ろしい痙攣が彼女をとらえた」(44行目)という一文が配されている。この種の反転構造もまた文章を非常にドラマチックなものにしている。

さらには、この一文で始まる一段落は、単なる物語りだというよりは活写に近い。はたして、5行からのナレーションがここの瞬間の喚起に充てられている。すなわち、ナレーションの持続時間とストーリーの持続時間とがほとんど等しくなっている。

とりわけ、「死にそうだ、死ぬんだ!」(44行目)という直接話法においては、われわれ読者はジャンヌと持続時間を共有する。前節でも見たように、小説文では、このような直接話法においてこそ、ナレーションのテンポとストーリーのテンポとがぴったりと重なり合う。

はたして、第3部分において時間が迸り出ているとはいえ、この部分のナレーションの持続時間は2分程度に過ぎない。それに対して、ストーリーの持続時間は5分とか10分といった程度だと見なせよう。こうした観点から眺めても、「死にそうだ、死ぬんだ!」というこの直接話法は、時間の迸りを強く感じ取らせるものだと言える。

けれども、すでに述べたように、44〜48行目のこの一段落に関して言えば、全体的にも、ナレーションとストーリーのそれぞれの持続時間のあいだに一致が見て取れる。そのぶん、われわれ読者は臨場感を強く抱く。

こうした事態を引き起こす要因としては、直接話法のほかにも、表現上の重畳性が挙げられねばならない。「恐ろしい痙攣」(44行目)は、次の文のなかで、「残酷なひきつけ」(45行目)と言い換えられている。次いで、「狂おしいばかりの反抗心」(45〜46行目)は「呪いたい気持」(46行目)と並行的重畳性をなしている。最後に、「自分をめちゃくちゃにしたこの男」(46〜47行目)と「自分を殺そうとしているこのまだ見ぬ子供」(47行目)とは、ジャンヌの「憎悪」の対象として、やはり、並行的重畳の関係にある。

こうした三重の重畳性は、一方では、ナレーションの持続時間を長くし、他方では、言い回しの上での強調性を増幅させるものである。換言すれば、このようなくだりでは、多大な臨場感が醸し出されるとともに、読者による登場人物への感情移入が深甚なものとなる。

次の段落も時間の迸りを少しく感じさせるくだりであるが、もはや活写的な迸りは表出されていない。むしろ、時系列に沿った出来事の継起という自然な流れが描かれている。

もっとも、「するといきなり」（50行目）という言い回しは注意を要する。すでに見た「突然」におけると同様に、この言い回しにおいてもまた、ナレーションの持続時間とストーリーの持続時間とがぐっと接近し合う。出来事の淡々とした継起に一定の緊張感がもたらされる効果があると言えよう。

ところで、この第３部分での記述の総体は、終始ジャンヌの立場から見た事象についてのそれである。しかし、「産婆と医者が彼女の上にかがみこんで、からだをいじくっていた。二人が何かを取りあげた」（52～53行目）の箇所だけは、例外である可能性がある。なぜなら、この箇所は、単なる客観的な記述なのか、それとも、やはりあくまでもジャンヌの視覚に寄り添ってなされている記述なのか、この点が判然としないからである。

おそらく、この箇所は、語り手にとって、ストーリーを紡いでいくための便宜的なくだりなのだろう。だから、ジャンヌ、および、彼女に心理的同調を行っているわれわれ読者にとって切実な記述法が採られていないのだろう。

もっとも、「取りあげられた何か」（53行目）をめぐって、並行的ないしは重畳的な表記に満ちた、したがって、奔流を思わせる時間が経過するこれ以降の言説が展開される。

とくに、「それは、喜びが彼女のからだを横切ったのだ」で始まる一段落と、それに引き続く「子供がどんな顔をしているか見たかった！」で始まる一段落は、ナレーションの持続時間がストーリーの持続時間を凌ぐ観を呈している。

たとえば、「それは、喜びが彼女のからだを横切ったのだ。それは、咲き出たばかりの新しい幸福にたいする衝動だった。彼女は、一瞬にして、解放され、苦痛もしずまり、幸福になった。かつて味わったことのないほどの幸福だった。

心も肉もふたたび元気を取りもどしていた。母になったということを感じたのだ！」(58～62行目) のくだりは、直前の「そこで彼女は、無意識の身ぶりで、両腕をのばそうとした」の敷衍にほかならない。したがって、明らかにナレーションがストーリーを持続時間において凌駕している。

このくだりから任意の一、二文を削除しても文意の流れに支障を来すことはないだろう。しかし、そうしたなら、ナレーションの怒涛のような勢いがそのぶん殺がれてしまうはずだ。語り手は、ジャンヌが母性に目覚める瞬間を、表現上の際立った重畳性を駆使して、印象深く記述しているわけである。

さらに、この第3部分の地の文には、感嘆符のついた短文が連続して出てくる箇所がある。「母になったということを感じたのだ！／子供がどんな顔をしているか見たかった！」(61～63行目) のそれである。

地の文におけるこのような感嘆符の使用は、語り手自身が登場人物にたいして感情移入を行っていることを表すものであろう。あるいは、感情移入を行っている素振りを見せているのかもしれない。

いずれにしても、こういった表記は直接話法のそれと酷似している。「母になったということを感じたのだ！」は、「母になったのだ！」とほぼ等価であるし、「子供がどんな顔をしているか見たかった！」も、「子供がどんな顔をしているか見たい！」と難なく言い換えられよう。

直接話法に類する表記のこのような連続においても、時間の奔流ないしは怒涛が感じ取られるのは、論を俟たない。

第8章のテクストに関する以上の分析からも窺えるように、ナレーションのテンポは起伏に富んでいる。われわれ読者は、それによって醸成される時間の流れの緩急に心を委ねて、さまざまな情動を味わっていく。

4．おわりに

小説文の一般的原則の一つとして、ナレーションの持続時間がストーリーの持続時間より短いことが挙げられる。

モーパッサンの『女の一生』は、二十数年にわたるジャンヌの半生を描いて

いるが、ナレーションに要する時間、すなわち、われわれ読者がこの小説を読むのに費やす時間は、十数時間にすぎない。この不均衡は、『女の一生』の各章や各ページについても、おおむね認められる現象である。

それだけに、ナレーションが減速して時間が迸り出たり、ナレーションの速度の緩急によって種々のバリエーションが醸成されるのを目の当たりにすることは、文体学的に興味深いことである。なぜなら、それによって、文章の切迫感や臨場感、あるいは、ドラマチック性が生み出されるからである。あるいは、逆に、平穏感や沈静感が生み出されるからである。

その際にさまざまな形式が可能であることは、われわれが小論を通じて観察してきたとおりである。ナレーションの持続時間が相対的ないしは段階的に長くなったり短くなったりする場合もあれば、活写や直接話法に代表されるように、それがストーリーの持続時間にぴったりと重なり合う場合もある。後者の場合は、ナレーションの持続時間が絶対的に長くなるのだとも言えよう。さらには、ナレーションの持続時間がストーリーのそれを凌駕するような箇所では、怒涛のような時間の奔流といった趣が醸し出される。

こうした魅力的なバリエーションは小説文ならではのものである。

日常的な報道文や解説文、さらには、同じ文学という範疇に属するとされる戯曲や詩文においてすら、生み出すのが不可能な魅力である。

ところで、小説のストーリー展開を追うだけならば、その粗筋を読むだけでも、あるいは事足りるかもしれない。けれども、小説を読む醍醐味は、文体をいわば肌で味わい取ることにこそあるはずだ。そして、ナレーションの速度の緩急というファクターは、まさしく文体を大本から支えるいしずえの一つだと考えられる。

主要参考文献

－Berthelot (Francis) :*Parole et dialogue dans le roman*, Nathan, 2001.

－Bourneuf (Roland) et Ouellet (Réal) :*L'univers du roman*, PUF, 1975.

－Fontanier (Pierre) :*Les figures du discours*, Flammarion, 1977.

－GENETTE (Gérard) :*Figures Ⅲ*, Seuil, 1972.
－川本皓嗣／小林康夫編『文学の方法』、東京大学出版会、1996年。
－野内良三『レトリック辞典』、国書刊行会、1998年。
－吉田廣「時事フランス語の直接話法」、大阪経済法科大学論集第83号、2002年。
－吉田廣『フランス小説「女の一生」を斬る――小説文の成り立ちを探る――』、大阪経済法科大学出版部、2004年。